

書評と紹介

山下麻衣著

『看護婦の歴史』

——寄り添う専門職の誕生』

評者：早川 佐知子

1 はじめに

日本には「正看護師」「准看護師」という、2つの看護専門職が存在することは、誰も知っているはずである。しかし、それらの違いとは？と尋ねられると、正確に答えられる人は少ないのではないだろうか。養成過程が異なるであろうことは容易に想像がつく。そして、賃金に違いがあるであろうことも。しかし、賃金の差異の根拠となる、仕事の内容についてはいかがであろうか。病院に行けば、看護師の名札に「正看護師」「准看護師」という肩書きがついているので、ああこの方は〇〇なのだ、と思うものの、素人目には同じ仕事をしているようにしか見えない。実際に、正看護師と准看護師の職務範囲に関する国・都道府県レベルの規定は存在しないのである。ならばなぜ、このように異なる資格をあえて作っているのだろうか。

本書は、日本において近代医療が形作られ、「病院」という場所の意味合いが現在私たちの知っている「病院」の姿になってゆく段階とも言える、明治・大正期における看護婦*の姿を明らかにしたものである。つまり、看護婦とい

う主体が、どのように養成され、誰を看護し、どのような場で働いてきたのかという点を、歴史的に分析した書である。私たちは看護師と言えば、病院や医院、あるいは訪問看護という働き方をイメージするであろう。しかし、黎明期の看護婦は、現在と比べると実に多様な働き方をしていたのである。当然のことながら、そのことが、現在の「看護師」「准看護師」という2つの資格の併存にもつながりを持っている。

評者は、経営学の立ち位置から、アメリカの看護師（Registered Nurse）の働き方を主な研究対象としており、とりわけ、看護師という存在が形作られてゆく社会的な背景に強い関心をもっていた。それゆえ、経済史の研究者である著者が、日本の看護婦を対象として、広く社会の状況に目配りしながらその形成過程を明らかにした本書の存在を知り、大変嬉しく感じた次第である。日頃、アメリカにばかり集中し、日本の看護師について不勉強であることを猛省していたこともあり、合わせ鏡のようにして日本の看護師の社会的な歴史を学ぶことができたことは、非常に有意義であった。

一言で「看護師」と呼ばれる職種であっても、その国のたどってきた経路により、構造も、課せられる役割も、さまざまである。それゆえ、単純に統計上の数値のみで国際比較を行うだけでは、大切なことを見逃してしまう恐れがあるだろう。著者は当時の看護師の働き方を丁寧にたどり、質的に分析を行った。ここから、世界共通のように見える「看護師」という存在の、日本的な特質を浮かび上がらせることに成功し

*現在の正式名称は「看護師」であるが、本書に倣って、ここでも当時の呼称である「看護婦」を用いる。

ている。殊に、鎖国が終わり、勢いよく近代化の道を突き進んだ明治・大正期が生み出した諸状況、例えば日清・日露戦争、2つの大戦、貧富の格差や都市化などという一つ一つの背景と、看護婦という存在との結びつきが、いずれをとっても非常に興味深く描かれている。

2 本書の概要

多様な看護婦の姿と述べてきたが、いかに多様であったのかを、本書の概要とともに示したい。

多くの看護史の先行研究は、看護師の資格を持つ研究者、あるいは看護学の研究者によってなされてきた。ここでは、看護婦の社会的地位という視点に重点が置かれ、それを向上させるべくなされてきたものが多い。しかし、本書は、それらとは異なる目的を持ってなされたものであることを、序章で提示している。本書の目的は、以下の通りである。第1に、「日本において看護婦とはどのような存在であったのかを明らかにすること」である。第2に、「賃金その他の統計上の数値で示しうる看護婦の待遇を明らかにし、「女性が多く就く労働者」としての日本の看護婦の働き方の歴史を描き出すこと」である。第3に、「看護婦の待遇はどのような基準軸を定めたうえで誰によってどのように判断されてきたのか」について記すことである。このような社会科学的な視点を看護史の諸研究に加えたことが、本書の大きな意義であろう。

第1章「資格職としての看護婦」では、看護婦が資格職として認知される過程を描いている。都道府県ごとに看護婦規則が作られていた時期を経て、1915年に初めて内務省令としての看護婦規則が成立する。これらの変遷が看護婦の働き方に及ぼした影響について論じた章である。

第2章「戦地に派遣された看護婦」では、戦時救護を主に担った日本赤十字社の養成方法

と、彼女たちの仕事の内容を明らかにした。

第3章「派出看護婦会で働く看護婦」では、第二次世界大戦前の限られた期間ではあるが、大きな割合を占めていた「派出看護婦会」所属の看護婦の仕事内容と待遇について明らかにした。現在ではほとんど見られない「派出看護婦」という特異な形が存在したことそれ自体が、非常に興味深い。派出看護婦はかつての「付添人」とも異なるのである。しかし、この存在こそが前述の内務省令「看護婦規則」の発令へと導いたのであるから、歴史的に見れば重要な意味を持っている。

第4章「病院で働く看護婦」では、当時の病院で雇用されていた「看護サービスを提供していた者」の姿を、量的・質的に明らかにした。当然のことながら、看護婦資格を持つ者も、無資格の者も存在する。彼女らの処遇、そして、社会的なイメージについては、医学の歴史と重ねて読んでも、女性労働の歴史と重ねて読んでも、大変興味深い。

第5章「貧困な患者のために働く看護婦」では、当時大きな社会問題とされつつあった都市貧困層の存在と、それらが抱えた疾病の深刻さに対処すべく尽力した看護婦たちの取り組みについて明らかにした。これらの多くは、現在では保健師の担う仕事である。公衆衛生という概念の発達とともに歩みを進めた巡回看護事業には、どのような看護婦が携わったのか。残された当事者の声から、その志や本音が伝わってくる。

第6章「海外により近い看護婦」では、公衆衛生の改善活動に携わった看護婦たちの姿を明らかにした。彼女らは、ほとんどが高学歴の、いわばエリート看護婦であるが、海外に視野を広げ、現地に赴いて積極的に学ぼうとしていた。その見識の高さと行動力には、当時このような看護婦たちが存在したのかと驚かされる。

第7章「小学校で働く看護婦」では、現在の養護教員の前身とも言える、学校衛生を担う主体として養成された、学校看護婦の働き方の特性を明らかにした。学校看護婦たちも、公衆衛生に携わる看護婦同様、高い志を持っていた。しかし、現実の状況はなかなかそれに追いつかず、悩む姿が描かれている。

以上のように、当時の「看護婦」は、想像以上に多面的な顔を持っていた。戦争や貧困など、社会問題が現在よりずっと深い闇を持っていたこと、そして、明治新政府が手探りで医療政策を作り上げてゆく過程であったことなど、さまざまな社会的条件に翻弄されながら、今ある「看護師」の礎を築いていったのである。本書を読んで、未だ洗練された看護の制度が作られる前の段階において、病院で、戦地で、貧困地区で、そして学校で、自らの仕事を全うしようとした看護婦たちの存在に感謝の気持ちを抱くのは、評者だけではあるまい。

3 いくつかの論点

最後に、アメリカの看護師の働き方を研究する評者の視点から、とりわけ興味深かった点、さらに深く知りたいと感じたいいくつかの点を挙げたい。

第1に、病院における看護婦の等級についてである(第1章)。当時の看護婦には特等、一等、二等、三等という区分があり、これによって処遇も異なっていたとのことである。そして、ここで区別の根拠となる能力は「学説に範を置いた看護技術の高低に加えて、「感じが良い」といった人柄の要素、患者の理不尽な行動に対する「忍耐」といったことも含まれていた」とある。現在でも、日本の看護師は人柄や忍耐が求められる度合いが、他国と比べると強いように思える。その潮流はいつこにと日頃から疑問であった。このような人事評価が、日本

の看護婦の場合、これまでどのような基準でなされてきたであろうか。他職種や、海外と比較した場合に、非常に興味深い知見が得られるように思う。

第2に、派出看護婦のアイデンティティについてである(第3章)。アメリカの派遣看護師に焦点を当てて研究している評者にとっては、この章が最も興味深いものであった。アメリカにおいても、病院看護に従事することが好まなかった時代、独立自営の訪問看護師が多く存在していた。病院看護は看護学生が主に担うものであり、有資格者は自律性を持って、1人で患者の自宅へ赴くのがよしとされた。アメリカの場合、当初から職業団体が「自律性」を追い求めてきた歴史があり、訪問看護師たちも自らの働き方に誇りを持っていたと評者は捉えている。本書では、派出看護婦は、患者の自宅というよりもむしろ入院している病院へ赴いて、病院に雇用されている看護婦と分業しながら看護に当たったと記されている。また、層は比較的ベテランの看護婦が多かったとのことであった。このような派出看護婦たちは、自らの働き方をどのように捉えていたのであろうか。質を担保できなかったこと、開戦により人手不足となったこと等から、この事業は縮小していくことになるが、日本の看護婦が戦後も「自律性」をアメリカほど全面に押し出してこなかった現在までの経緯に鑑みると、この派出看護婦という存在の盛衰は、深い考察に値するように思える。

第3に、病院で働く看護婦のローテーションについてである(第4章)。本書では1927年発行の『職業婦人調査』をもとに、病院に勤務する看護婦の働き方や処遇を明らかにしている。ここにおいて、「一般的に正看護婦は半年ごと、見習い看護婦は三ヶ月ごとに各科を回った」との記述があることが興味深い。見習い看護婦はともかく、正看護婦がローテーションする期間

としては半年というのはいかにも短い。日本の看護師が現在でも専門科の看護を追求するよりも、ゼネラリストとしての活躍を求められる点を、評者はひとつの慣行として重要であると考えていた。このように、当時から頻繁にローテーションを繰り返す人事労務管理が生まれた背景とは、何だったのであろうか。医療技術の未発達により、現在ほど医療自体が専門化されていないことはもちろんとしても、極めて短い期間でローテーションする意義はどこにあったのか。


第4に、職業団体についてである。本書では全体を通じて、職業団体に関する記述が少ない。現在の日本看護協会の潮流の1つである、日本看護婦協会、日本帝国看護婦協会は、このような看護婦をめぐる状況の中で、どのような

役割を果たしてきたのであろうか。こちらも、American Nurses Associationの影響力が大きかったアメリカの場合と照らし合わせると、興味深い点である。

以上のように、日本の近代化という背景の中で、揺籃期の看護婦の姿を描き出した本書は、かようにさまざまな新しい知見をもたらしてくれる貴重な研究である。医療や社会保障の研究者にも、労働史の研究者にも、大いに学術的貢献をしてくれるはずである。

(山下麻衣著『看護婦の歴史——寄り添う専門職の誕生』吉川弘文館、2016年12月、10+191+3頁、定価3,500円+税)

(はやかわ・さちこ 広島国際大学医療経営学部講師)




有斐閣 出版案内

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17/Tel.03-3265-6811
<http://www.yuhikaku.co.jp/>
(表示価格は税別。消費税込みの金額が定価です。) ◎図書目録送呈◎

Anniversary
140th
1874年創立

大人のための社会科
 一五〇〇円 (四六判)

井手英策・宇野重規・坂井豊貴・松沢裕作著
 ◎未来を語るために 気鋭の社会科学者が、日本社会を12のキーワードから解きほぐし、未来への方向性を示す。「反知性主義」が幅をきかせる時代に、私たちがきちんと考え、将来を語り合うための共通の理解、土台となりうる「大人のための教科書」!



ファッションで社会学する
 一三〇〇円 (四六判)

藤田結子・成美弘至・辻 泉編 ファッション誌のメディア史から最新の文化事象の分析まで、オールドクスの社会学的思考にアプローチしていく。ファッション「で」学ぶ、野心的な社会学の入門書。

社会学入門
 予価一九〇〇円 (有斐閣ストウディエ)

筒井淳也・前田泰樹著 ◎社会とのかかわり方 「出生」「労働」「老い」といった「人生のイベント」を、計量手法とフィールドワークという対照的な方法論者が各々の考え方を示し、社会学的に考える道筋を描きだす。

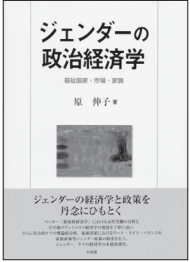
社会学の力
 二五〇〇円 (A6判)

友枝敏雄・浜 日出夫・山田真茂留編 ◎最重要概念・命題集 社会学固有の概念、方法、命題の中で最も重要な70項目を厳選して解説。

はじめてのジェンダー論
 一八〇〇円 (有斐閣ストウディエ)

加藤秀一著 なぜ人は男か女かという性別にこだわるのか。ジェンダー論の基礎から最新動向まで、軽妙な講義調で解き明かす、著者待望の書。

ジェンダーの政治経済学
 原 伸子著 ◎福祉国家・市場・家族



原 伸子著 ◎福祉国家・市場・家族
 ベッカード「新家庭経済学」における女性労働の分析とその後のフェミニスト経済学の発展を丹念に追い、さらに社会的ケアの理論的分析、福祉国家におけるワーク・ライフ・バランスや家族政策等ジェンダー政策の精査を行う。
 A5判 三九〇〇円